

龜井勝一郎全集

第十七卷

講談社

龜井勝一郎全集 第十七卷



昭和四十六年十一月二十日 第一刷発行
昭和四十九年二月二十日 第二刷発行

定価 二二〇〇円

著者 龜井 勝一郎

発行者 野間 省一

発行所 東京都文京区音羽二一二二
株式会社 講談社

郵便番号 一一二
電話 東京〇三(料)一一一(大代表)
振替 東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社
製本所 大製株式会社

落丁本・乱丁本は
お取り替えいたします。
© 龜井妻子 昭和四十六年

Printed in Japan

龜井勝一郎全集

第十七卷

編纂

河上徹太郎
中村光夫
山本健吉
丹羽文雄

第十七卷
目次

古代知識階級の形成

序	九	新しい精神地帯	九
言葉の誕生と伝承	一〇	中皇命	一五
もの思ふ神	二〇	柿本人麿	一九
語部と神語について	二六	古代民衆詞華集	二九
罪と死をめぐる信仰	三三	仏教伝来	三七
罪とその行方	三三	恐怖と祈禱	三七
死と死後の行方	三七	聖徳太子の信仰	一〇三
神と人との別れ	四一	万葉集への影響について	一〇六
古代の危機	四一	造型への情熱	一一一
天武天皇の悲劇	四四	天平びとの精神	一三三
宣長における古事記と書紀	四九	七世紀から八世紀へ	一三三
流離の皇子たち	五五	唐風と和風	一三七
初期万葉びと	五五	自然と孤独	一四四
古代知識階級の形成	五五	国分寺建立	一四七

信仰の諸相について……………	一五
後記……………	一六

年表……………	一六
---------	----

王朝の求道と色好み

序……………	一五	賢し女と麗し女……………	二五
密教信仰と芸術……………	一五	美貌伝説……………	二五
平城京から平安京へ……………	一五	かげろふの日記について……………	二六
無常観と山岳……………	二〇	罪と死をめぐる信仰……………	二五
普遍的人間への道……………	二四	王朝の危機意識……………	二五
秘密荘厳心の表現……………	三〇	罪と地獄……………	二六
弘法伝説……………	三六	臨終の行儀と浄土……………	二七
色好みと恋歌……………	三五	源氏物語……………	二八
万葉集から古今集へ……………	三五	紫式部の手紙……………	二八
紀貫之……………	三五	光源氏の色好み……………	二八
九世紀における異端……………	三六	生の流転とその翳……………	二九
業平伝説……………	四二	宿世のあはれと死の聲音……………	三〇

日本人の精神史研究（ノート）

第一部

三六

第二部

四二

解題

四七

病める魂

三八

女房文学をめぐる

三六

異形のもの

三八

愛欲のあはれ

三六

源氏物語の行方

三六

藤原の栄華と造型美

三六

阿弥陀堂

三六

信仰と快楽の涯に

三七

物語の絵画化についてなど

四〇

王朝の秋

四六

末法の世と凡夫の自覚

四六

中世への道

四六

後記

四九

年表

五二

古代知識階級の形成

——日本人の精神史研究——

序

私は現代日本の文化史的位位置について、その特徴をかつて次のやうに規定してみたことがある。日本はアジアの一環として、紀元前からその影響をうけてきたが、他のアジア諸国とは異質の特殊な「飛地文化地帯」を千数百年のあひだに形成した。明治の開国とともに、今度は西洋の文化を急速にうけ入れたが、いかなる西洋諸国とも異質の特殊な「飛地文化地帯」を形成しつつある。したがって、現に我々のおかれてゐる位置は、この二重の性格を帯びたといふ意味でまた特殊な「飛地文化地帯」である。世界に類例のない知的実験を課せられてゐるやうなもので、これが現代日本の個性といふものではなからうかと。

日本海と太平洋にかこまれた極東の小さな島国、そこに住む人間にとつて、海といふものは、好奇心をそゝる絶大な役割を果してきたにちがひない。海を渡つて来たものへの貪婪な好奇心と、海の彼方に様々の意味での「母国」があると

考へたときのその「母国」へのノスタルジアと、これは「古事記」を支へてゐる古代人の詩心であるとともに、日本人の心の伝統と言つてもいいものではなからうか。大海にかこまれた「飛地」に形成された知的エネルギーは、どのやうな性格をもちつつ蓄積されてきたか。また二重性を帯びた現代で、それはどのやうに發揮されつつあるか。或は変質を迫られ、乃至は消滅しつつあるか。

明治開国から未だ一世紀を経てゐない。長い歴史の眼からみると実に短期間だ。こゝで圧倒的な威力をもつてゐたのは、言ふまでもなく「近代化」といふことであり、同時にそれと動反動のかたちで「伝統」の問題もくりかへされてきた。現代文化の雑居性については、すでに多くの人々によつて指摘されてゐるが、世界のあらゆるものの断片があり、異質物の同時存在と同時に享受があり、それによつて我々は絶えず自己喪失の不安におびやかされ、また同じところからくる精神の分散と分裂を、精神の危機として感じてもきた筈である。

我々はいま「比較の時代」に生きてゐると言つてよからう。たとへば日本の伝統を検討するとき、必ず「西洋」との比較をこゝろみざるをえない。またそこから受け入れた「近代的解釈」をこゝろみようとする。我々はそれを当然のことのやうに思つてゐるが、比較も、近代的解釈も、拒絶したら

どういふことになるか。歴史や古典に対するとき、私はいつも「復原力」をまづ念頭におくが、それは学究としてのきびしい実証力と、詩人としてのゆたかな想像力との合致である。在りし日の原型、古代人の息吹に肉迫しようとする至難の業だが、この「復原力」自体に、すでに「西洋」の影響はつよく作用し、西洋文化からうけたイメージが混入してゐることに気づく。

比較することで、それぞれの特徴があきらかになるのはたしかだ。しかし比較しえない絶対的と思はれる異質のもの——障壁もある。私は日本文化の異質性だけを強調することによつて、自己閉鎖的になるのを避けたいが、相互に翻訳しえないどうにもならぬものがあることは、誰でも気づいてゐるだらう。同時に私のいふ障壁、どうにもならぬものに対して、西洋風の思想でこれを打ち破り、否定し改造しようといふ立場もありうる。果して否定しきれるかどうかは別問題として。

たとへば、よく言はれることだが、日本人は感覚的であり、情緒においても繊細だが、論理的思考力に乏しく、思想を体系化する力を欠いてゐると。この「思想」といふ言葉からして問題で、我々の念頭には、西洋伝来の、堅固な体系と鋭い論理と抽象化能力によつてつらぬかれた「思想」が浮ぶが、今度はそれをかりて「日本思想」に向ひ、比較したと

き、どういふことになるか。「近代的解釈」によつて再編成することは出来るかもしれない。またさうしなければ、現代ではもはや通じない点もある。私もそれをこゝろみながら、同時に、何か重大なものを失つたやうに思ふ。

民族の一大変貌期だから、すべては変質を迫られるのは当然だし、古典への「純粹復帰」など不可能だと知りつゝ、この喪失感からまぬかれたい。それは一体何かを、私はこの精神史研究でたしかめたいのである。また比較せざるをえないことで、愛情の分散が起り、比較自体が目的となるために、一切が資料化するといふ危険にもさらされてゐる。思想も、美術も、歴史も、古典も、学問的には精密になりながら、ただ比較するための資料にすぎなくなつたときの空虚感もある筈だ。いやこの空虚感を充実感と錯覚してゐる人々も少なくない。

「日本思想」などは思想ではない。むしろ一切の伝統を根本から否定し、日本人の頭脳を改革して、全く新にこれからの「日本思想」を形成すべきであるといふ論もむろん成り立つわけだ。我々はいまひとつの岐路に立つてゐる。私はさきに二重の性格を帯びた特殊な「飛地文化地帯」と言つたが、ここに生育した我々は、或る意味で二重の異邦人と言つてもよからう。これほど西洋に学びながら、西洋に対しては異邦人であり、これほど伝統伝統と言ひながら、自国のそれに対し

でもすでに一種の異邦人となつてゐるのではないか。現代の日本論、文化論の根底にあるのは、この浮草的知性を自覚したときの不安であらうと私は思つてゐる。

日本人の精神史研究といふテーマは、私にとつては身にあまる仕事だといふことはわかつてゐるが、日本史の各時代を通じて、我々の祖先は一体どんな精神生活を送つてきたのか。さきに述べた「飛地」に形成された知的エネルギーの性格と特徴を、この際私は出来るかぎり明らかにしたいと思つた。古典とか伝統の名で、断片的に、雑然と、しかも変質しつつ眼前に存在してゐる多くのものがあるが、大切なのは性急な解決でも統一でも解釈でもない。矛盾し混乱してゐる諸要素を、まづ出来るだけその原型においてつきとめてみることだ。すでに抜き難く我々の頭に入つてゐる「ヨーロッパ的諸觀念」と、それがさらに矛盾するならば、それをも深めてみることもだ。私はかういふ気持ちで、まづ日本の古代に足をふみ入れようと思つてゐる。

思想について

そこでこのテーマを展開するに當つて、私に多くの示唆を与へた二つの論文について語つておきたい。丸山真男氏の「日本の思想」（昭和三十二年、岩波「現代思想」講座第十一巻）

と、福田恆存氏の「日本および日本人」（昭和三十二年、著集第七巻）である。日本人の精神史研究の上で、必ず直面しなければならぬと思はれる二三の問題について、両氏の見解を通して考へてみたい。

丸山氏のしらべたところによると、日本の「インテレクチュアル・ヒストリー」を通観した書物は殆どないさうである。日本精神史といふ範疇は、戦時中には、日本「精神史」から「日本精神」史へ変容し、おそろしく独断的で狂信的な方向を辿つたことは周知のとほりである。各部門の個別史なら、たくさんあるが、日本思想史の包括的な研究はいちじるしく貧弱だといふことである。それはなぜか。丸山氏は日本の思想とよばれてゐるものの性格を検討しながら、次のやうに問題を提出してゐる。

「一言でいうと実もふたもないことになつてしまふが、つまりこれはあらゆる時代の觀念や思想に否応なく相互連関性を与え、すべての思想的立場がそれとの関係で——否定を通じて——自己を歴史的に位置づけるような中核あるいは座標軸に當る思想的伝統はわが国には形成されなかつた、ということだ。私達はこうした自分の置かれた位置をただ悲嘆したり美化したりしないで、まずその現実を見すえて、そこから出発するほかはなからう。」

「思想と思想との間に本當の對話なり対決が行われないよう

な『伝統』の変革なしには、およそ思想の伝統化はのぞむべくもないからである。」

日本における思想なるものの存在の特徴、あるひは欠陥についての、おそらく根本的な命題であらう。この場合、対蹠的にキリスト教を思ひうかべるなら、西洋ではそれが中核あるひは座標軸となり、激しい対話対決がそれをめぐつて持続してきたことに誰でも気づくだらう。無神論は、この背景のもとに無神論たりえたのであり、共產主義も例外ではない。

では日本の仏教はどうであつたかといふ反問がすぐ起る。さらにそれ以前の古神道は、この点でどういふ作用をもたらしたか。併せて日本の風土とか、日本人の気質も考へなければなるまい。むろん大問題で、私は精神史研究であきらかにしたいと思つてゐるが、思想と思想とのあひだの厳密な対話対決と、とりわけその持続性の稀薄なことは、承認せざるをえないのではないか。

私は明治以後だけにかぎつてみても、これは我々の精神の一大空白ではないかとかつて書いたことがある。「思想」は存在したであらうか。丸山氏の指摘されるやうに、古来からの日本人の精神の「無限抱擁性」のために、すべてを受けいれ、対決なしに融合し、時代を経るにつれて、雑然と断片的に存在するやうになる。現代では、伝統といつても、それは過去の各時代から恣意にとりあげられた、それぞれに聯関性

のない対象にすぎない場合が多い。また外来思想に対しては、無条件に受容するか、乃至は盲目的な拒否、あるひは偏見だけでのぞみやすい。明治のプロテスタンティズム（新教）と、昭和の共產主義が、たとひ伝統は浅く未成熟ではあつても、はじめて「近代的」意味での対決の精神を我々にもたらしたと言はれるが、過言ではあるまい。

*

私は「思想」を「思想」たらしめる原動力のひとつは、拒絶の大きいと深さだと思つてゐる。盲目的拒否や偏見ではなく、長い研究と思索の後に來た強烈な拒絶——或る意味では非寛容とも偏狹ともみえる——その力である。これが対決の所産ではなからうか。鎌倉時代の仏教にはそれがあつた。表現の点から言ふなら日蓮が目だつ。さらに江戸時代の本居宣長と、明治の内村鑑三など、私はさういふ点での典型として挙げたい。話はそれるが、日本共產党がもし日本の共產党であることを欲するなら、内村鑑三の拒絶の大きいと、その底にある高度のキリスト教的倫理性を承けつぐ必要があるのではないかとかつて私は書いたことがある。拒絶の政治的ポーズの大きさに比べて、拒絶の倫理的深さがないからである。

ところで現代人である我々は、遺憾ながら深い拒絶力を失つてゐる。丸山氏のこの論文の背後にあるものも、自他への

さういふいだちではなからうか。しかし、この「いらだち」を性急に表明すると、忽ち極端な国粹主義になつたり、極左冒険主義になるといふ、精神上のバランスのとりにくい国柄、乃至は氣質も念頭におく必要がある。同時に我々は、「ものわかりのよさ」と「あいまいさ」の中に漂つてゐる自己を、嫌惡してゐるのだ。さもなければ、「伝統」も「近代」も、すべてを資料化して比較し、分析と解釈するに止り、思想における主体性を永久にもちえない悲しみを味つてゐる。

かういふとき、私はまづ一番根元のところへ歸つてみることにしてゐる。「思想とは何か」と自分に問うてみて、言はば対決のための根本の場を考へたとき、結局それは信仰の問題ではなからうか。この点は東西共通してゐると思ふが、キリスト教的な神でも、仏教の仏でも、その教に直面して、對話して、その教に対する自己の位置を決定しようとする持続的な行為——これが思想的行為とよばれるものの根本ではなからうか。

思想とはまづ、神あるひは仏に対する自己の位置の確定のための戦ひである。肯定否定とはない。信ずるか信じないか。そこでこの対決と持続の過程、及びその結末に思想は成立する。また、こゝに身をおいてみて、はじめて懷疑精神とか、自我の確立とか、絶望とか、拒絶といふ言葉が生きてく

るのではなからうか。換言すれば、それは自己の中核、座標軸の確立への基本的欲求と言つてもよい。これなしに思想を語ることが出来るか。そしてこの点で、キリスト教と仏教とは（或は古神道も）、いちじるしい相違を示してゐることに気づく。実は日本人の精神史にとつて、これが一番気になるテーマではなからうか。

丸山氏のこの論文は、要するに日本人の思想の構造の特徴をあきらかにしたもので、私は多くの示唆を与へられ、同感する点多かつたが、同時に激しい對話とか対決力が發達せず、いはゆる仏教的寛容といふか、或は古神道的抱擁性といふか、難然とさまざまのものを受容し、論理性もなく体系化もない、まさに日本の思想の欠陥とみなされてゐるそこから、何が發生し、どういふ特殊性を帯びたか。この反面を考へざるをえなかつた。個人の場合もさうだが、一民族の生成においても、長所と欠陥はからみあつたまゝすんでゆくものである。私は丸山氏の指摘した欠陥を承認するとともに、それがどのやうな別個の特徴となつてあらはれたかを次に考へてみたい。

造型美について

福田恆存氏の「日本および日本人」はこの点で示唆の多い

論文である。丸山氏の論文とは無関係に書かれたものであり、立場も角度もむしろちがふが、こゝでもとくに私の関心をひいた問題を取りあげてみたい。やはり日本人の精神史の全体につながる問題である。福田氏は引用してゐるが、イギリスの歴史家サンソムの「日本文化史」の第三章（「本来の崇拜」）の中の、日本人の宗教心にふれた次のやうな一節に私も以前から注目してゐた。

「……いやなもの、浄めねばならぬもの、贖わねばならぬものは、罪ではなくて穢（けが）れである。不潔ということと區別された罪の観念は欠けているか、でなければ幼稚である。日本人はその歴史を通じて、『罪惡』の問題を識別する或る程度の無能力さと、又この難問題を解くことに或る程度の氣乗りなさを示している。一度こゝろ書いて見た後、更に筆者自身の心の中で、この意見に挑戦する反対の考も起る。然しそれは不完全な言い方かも知れぬが真実を語っていると思う。古代から現代まで、日本人の歴史を研究する際に困難を感じることの多くは、日本人が嘗て罪惡感の苦惱を味わっていないことを想起すれば、比較的よく分るのである。」

こゝで「罪惡感」といふ言葉ひとつとりあげてもむづかしい。サンソムの心底にあるキリスト教的罪惡感をもつてすれば、日本人のそれは甚だ異質のものである。またたとへば親鸞が日本人としていかに罪惡感を深めたかをもち出して、

その点からの反論も出よう。しかしヨーロッパ人の眼に、なぜこんな風に映つたか、我々の氣づかない固有性（その是非は一応別として）があるとすれば、改めて反省してみることが大切だ。この問題について、福田氏は次のやうに述べてゐる。

「不潔を惡であるとする考へ、といふよりは不潔にしか惡を意識しない心理、これはかならずしも神道的観念に養はれた古代日本人のばあひにのみひうることではありません。現代の日本人についても、そのうちでもつとも西洋的教養を身につけてゐるひとたちについても、そのまゝあてはまるのです。日本人の道徳感の根底は美感であります。そして、その美感の最低限を示す原理が『汚れてゐない』といふことであり、それがまた同時に最高原理にもなりうるのです。つまり、『汚れてゐない』といふ『醜惡の欠如状態』が積極的な最高の美にもなりうるのです。」

サンソムの指摘した点が、反面にどういふ意味をもつてあるかが、こゝに改めて思ひ出される。日本人の罪惡感（もしこの言葉を使ふならば）は、仏教の伝来とともに変化し、さらに千年余を経て、明治以後のキリスト教の流入によつてこそし変化したと思はれるが、日本人の精神史を通観して言ふなら、福田氏の見解は重要なポイントをつかんでゐるのではなからうか。